



## 第45回 多様な世界観のなかで生きる

## ▼正月の風景

今年の正月は雪もなく比較的おだやかだった。大みそかに紅白をみて、元旦には初詣をして家族と静かに過ごす。おせち料理をつまみ、どうでもいいようなTVを見てぼんやりと時間が過ぎていく。雑煮は、甘いぜんざいに限る。じつは、すまし汁の雑煮があることを中学生になるまで知らなかつた。自分が思う世界というのは、育った家庭の習慣の影響がとても大きい。懐かしい風景、懐かしいにおい。詩人の長田弘が「風景を生きる」と語っていたが、人はまさに風景のなかで育ち、風景を抱いて生きていくに違いない。

## ▼文化のなかで生きる

民族には昔から根付いた文化や習慣が色濃く残っている。他人には意味不明なことも、その人たちの内在的な倫理に照らせば、許せないことがある。北海道のアイヌ村を訪れた際、囲炉裏の前で立て膝をしたら、現地の人にひどく叱られた。火の神様に失礼だ、ということらしい。イザベラ・バードの「日本奥地紀行」には、明治初期の北海道のアイヌ村の様子が詳しく紹介されている。アイヌの人は素朴で誠実な人たちだが、未開人として日本人（内地人）からひどい差別を受けていたようだ。また、20年以上前にアメリカに留学中に、韓国の先生と雑談していて、何となく歴史の話題となり、急に険悪な空気になった。「日本が朝鮮で何をしたのか、君はもっと勉強すべきだ」と強い口調で指摘された。その人は、とてもおだやかで知的な人だったので、ちょっと驚いた記憶がある。民族、国、文化、宗教、そして戦争や差別の歴史を背負った関係、そういうものを含めて、対等な関係、互いを尊重する関係を作ることが、いかに困難なことか。それでも、対話をくりかえし、互いを理解していくしかない。

## ▼テロや戦争の対極にあるもの

医学の進歩に伴い、知識量はどんどん増えていく。でも、本当に大切なのは、問い合わせのものを見つ

けること、問い合わせ続ける忍耐強さ、ではないのか。医学知識でわかることは、いずれ人工知能が答える時代がくるだろう。問題にぶつかつたとき、「わかりやすい理屈」に簡単に流されてはいけない。批判的精神を養うこと、それは本当なのか、別の見方はないのか、歴史的にはどうなっているのか、学生には多面的に考える癖（教養）を身につけてほしい。認知症で誤嚥性肺炎になった患者さんの治療をどうすべきか、本人なら何を優先するだろうか、意思決定をどう支援すべきか。臨床現場では、たくさんの問い合わせが生まれる。そういう問い合わせに対して、「私の仕事ではない、関係ない」と耳を塞ぐのではなく、ともに考え続けること。そういう力が求められている。世界は本当に多様だ。「自分が”絶対に”正しい」と思ったら、“ちょっと待てよ”、と立ち止まって考えてほしい。安易な答えに飛びつかない、対話しながら真摯に答えを求める柔軟で粘り強い姿勢こそが、テロや戦争に対する真の防壁になるのではなかろうか。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)